

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：24402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23112

研究課題名(和文)「アテナイ性」再考 アッティカ地域史叙述・碑文研究の視点から

研究課題名(英文) Revisiting the Multilayered Athenian-ness: Atthidographic and Epigraphical Perspectives

研究代表者

竹内 一博 (Takeuchi, Kazuhiro)

大阪市立大学・大学院文学研究科・都市文化研究センター研究員

研究者番号：10846083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アッティカ史叙述および碑文慣習の視点から、重層的な「アテナイ性」のナラティブについて再検討した。(1)ディオニュソスの到来伝承について、アッティカ北東部の二つのデーモスとアテナイ中心市の二つのディオニュソス神域にまつわるアッティカ史叙述断片の社会的文脈を明らかにした。(2)トリコス供犠暦における誓いの文言について、新たな補いと解釈を提案した。(3)顕彰決議によって授与された冠のその後について、奉納、顕彰決議、聖財目録・会計文書、法廷弁論、アッティカ史叙述断片を検討し、顕彰の記憶は冠というメディアを通じて、テキストを変えながらも様々な文脈に位置づけられていったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アッティカ史叙述におけるディオニュソスの到来伝承が、場を構成する物理的なモノと多様に結び付けられながら語られていることを明らかにしたことは、アテナイ史の重要史料でありながら、その断片的な伝存状況と叙述スタイルが包括的な利用を妨げていたアッティカ史叙述断片を、様々な場から横断的に分析し、モノとしての碑文史料を軸に記憶の有り様を考えることが可能となる。また、実見調査に基づいた碑文研究は、テキストの内と外との関係を問い、テキストが成立する前後の位相を考察する点において、歴史叙述や法廷弁論のテキスト分析に応用が可能であり、時代や地域を問わずにテキストを通じた歴史研究の比較材料となりうる。

研究成果の概要(英文)：This research investigated the multilayered Athenian-ness from the perspectives of the Atthidography and epigraphic habit. (1) I have revealed that the advent of Dionysos in the Atthidographic fragments was variously associated with the social contexts of memory on two peripheral Attic demes and two central Athenian sanctuaries. (2) I have presented a fresh text based on autopsy with offering epigraphical notes and proposing new restorations for the oath of the auditor and the audit of officials appended to the end of the Thorikos calendar (IG I3 256 bis, lines 57-65). (3) While considering dedication, decree, inventory list, oratory, and Atthidographic fragment, I have traced a life cycle of the honorific crown from award through dedication to melting down. The memory of honor could be vitalized through a physical crown as a medium, though changing the text.

研究分野：古代ギリシア史・碑文学

キーワード：アッティカ史叙述 アテナイ性 碑文慣習 デーモス ポリス デイオニュソス 奉納碑文 フィロコロス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、アテネ国立カポディストリアス大学における PhD 研究 *Land, Meat, and Gold: The Cults of Dionysos in the Attic Demes* (Athens 2019) を契機とする。そこで明らかとなったように、アッティカの地域共同体であるデーモス (区) は、それぞれのミクロコスモスの中で過去の記憶を保存する「場」(神殿、石碑、奉納物、供犠、祭儀、劇競演など) を形成していた。同じことはポリス共同体についても言え、ポリスというマクロコスモスの枠組みにおいて形作られる記憶と「場」が、アテナイの人々によって共有されていたと考えられる。

一方、前 5 世紀末から前 3 世紀中頃にかけて、主にアテナイ人によって著されたアッティカ地域の編年史、すなわち『アッティカ史 (*Atthis*)』では、地域の神話伝承や記憶が「アッティカ史叙述 (*Atthidography*)」に取り込まれていくプロセスの中で、いわゆるポリスとしての「アテナイ性 (*Athenian-ness*)」にあわせた側面を付与されるようになる。つまり、ポリスにとっての単一の「アテナイ性」を作り出すために、書き換えがなされてきたと言える。

では、このような重層的な特徴を持った「アテナイ性」は、具体的にどのような構造になっているのか。また、重層的な過去や記憶は、どのように単一のポリスの歴史として変容していったのか。そこで、アッティカの地域およびポリスの碑文史料の実証的研究をもとに、アッティカ史叙述断片を分析することを目的として、本研究課題が設定された。

2. 研究の目的

上述のように、本研究課題では、アテナイ人が『アッティカ史』の歴史叙述においてアッティカのローカルな過去を作り替え、「アテナイ性」のナラティブを付与していくプロセスとその重層性を、地域レベルの碑文だけでなく、ポリスレベルの碑文からも実証的に検討していくことを目的とした。すなわち、「マスター・ナラティブ (大きな物語)」の分析に偏りがちであった古代ギリシア史研究に対して、地域の記憶を保存する碑文史料、および地域史叙述の断片史料を考察の俎上に載せ、重層的なアッティカの歴史を再検討することをめざした。

3. 研究の方法

(1) 本研究課題では、地域レベルのみならず、アテナイ史のソースとなっているポリスレベルの碑文の読み直しも行うことにより、ポリスの側のナラティブがどのように作り替えられ、また地域史叙述とどのように統合され「アテナイ性」を形成していったかを検討できるようにすることが目標の一つである。そのために、1 年目と 2 年目に継続して海外調査を行い、碑文史料の実見調査を積み重ねる。

(2) アッティカ史叙述テキストの読解、および古代ギリシアの歴史叙述に関する二次文献の批判的摂取を進める。とりわけ、フェリクス・ヤコービ編集の『ギリシア歴史家断片集 (*Die Fragmente der Griechischen Historiker*)』だけでなく、そのオンライン改訂版である『ブリル新ヤコービ (*Brill's New Jacoby*)』や、イタリア語の訳註シリーズ『ギリシア歴史家断片集 (*I Frammenti degli Storici Greci*)』を入手し、アッティカ史著述家たち (*Atthidographers*) の断片テキストを多角的に検討する基盤を整える。

(3) 年に 2 回程度、研究会・学会報告または参加をし、国内外の研究者と意見交換を行う。2019 年 11 月には、古代ギリシア文化研究所 2019 年度年次総会・研究会 (共立女子大学) において、トリコス供犠暦の校訂テキストにおける碑文学的問題を検討した。2019 年 12 月、古代史研究会第 18 回大会 (京都大学) において、アッティカ史叙述に描かれたディオニュソスのアッティカ到来伝承について考察した。2020 年 1 月には、北米ギリシア・ラテン碑文学会第 3 回大会 (アメリカ合衆国・ジョージタウン大学) に参加し、碑文慣習をめぐる様々な側面について議論を深めた。また、2020 年 12 月には、日本西洋史学会第 70 回大会小シンポジウム (大阪大学) において、アテナイの碑文慣習における冠の奉納について報告し、パネリストおよび参加者と意見交換を行った。2021 年 3 月には、師尾晶子教授 (千葉商科大学) とともに地域史叙述ワークショップをオンラインで開催し、古代ギリシアにおける地域のアイデンティティの立ち現れ方・描かれ方について議論した。

4. 研究成果

(1) 上述のように、本研究課題に密接に関連する、あるいは部分的に関わる研究報告を複数行った。現在までに論文として刊行されたものは多くないが、今後、それぞれの報告を元にした論文が刊行あるいは投稿される予定である。

(2) 「アッティカ史叙述におけるディオニュソス到来の記憶」と題する論文が、2021 年 3 月に刊行された (中井義明・堀井優編『記憶と慣行の西洋古代史—エジプトからローマまで』ミネルヴァ書房所収)。本論文では、アッティカ史叙述 (おもにファノデモスとフィロコロス) におけるディオニュソスの到来伝承が、「場」を構成する物理的な「モノ」とどのように結び付けられ、

また語られたかを検討した。その結果、アッティカ北東部のデーモスでは、デーモスの起源譚と分ちがたく結びついた二つのディオニュソス到来伝承が語られていた。セマキダイではアッティカ古来の地域・儀礼集団という記憶の「場」に、イカリオンではアッティカにおけるディオニュソス祭祀の中心的な神域としての記憶の「場」に結びつけられていた。一方、アテナイのアクロポリス南および東の地域においては、ディオニュソスの到来によってもたらされたブドウ酒という文化にまつわる複数の伝承が語られており、各神域においてポリスによる祭祀が執り行われ、それぞれの「場」を媒介として記憶が保持・想起されていたことを明らかにした。

(3) 「εὐθύνη τῶν ἀρχιῶν: *Euthynai* in the Sacrificial Calendar of Thorikos」と題する論文が、2021年中に刊行される予定である(当初、2020年9月にポルトガルのコインブラ大学における国際学会で報告することが受理されていたが、Covid-19の影響により学会は中止となり、論文集の刊行へと変更された)。本論文では、トリコス供犠暦(*IG I³ 256 bis; OR 146*)の末尾に加えられた「エウテュノス(執務審査役)の誓い」の文言を碑文学的に再検討し、テキストの新たな補いと解釈を提案した。誓いの部分はアッティカ史叙述と直接的に関連しないが、碑文の本文に刻まれた月毎の供犠に関する箇所は、アッティカ史叙述が語るローカルな神話や儀礼と無関係ではない。また、役職者の執務審査(エウテュナイ)というポリス制度の地域における運用や、誓いという身体的なパフォーマンスを石に刻むという碑文慣習を考える上でも、トリコス供犠暦のテキストの見直しは喫緊の課題である。

(4) アテナイの顕彰決議によって授与された冠のその後について、「アテナイの碑文慣習における冠の奉納と間テキスト性」という題目で、日本西洋史学会第70回大会小シンポジウム「古代地中海世界におけるメディア・コミュニケーション・間テキスト性」(大阪大学、2020年12月12日)において報告した。本報告では、奉納碑文、顕彰決議碑文、聖財目録・会計文書碑文、法廷弁論(デモステネス第22弁論『アンドロティオン弾劾』)、そしてアッティカ史叙述断片(アンドロティオン)を検討し、冠の授与から奉納、そして改鑄へという流れを跡づけながら、碑文テキストとメディア、およびそのコンテキストの相互関係について考察した。その結果、決議が石に刻まれた後も、その顕彰の記憶は冠というメディアを通じて、テキストを変えながらも、様々な文脈に位置づけられていったことが明らかになった。これについては、学術誌への投稿論文をまとめるなかで、改めて考察していく予定である。

(5) 本研究課題を通じて、Covid-19の影響から碑文の実見調査は行えなかったが、アッティカ史叙述によって保存された過去の記憶を、アッティカの地域やポリスの碑文から比較検討し、「アテナイ性」を再考するという目的については一定の成果を得られた。また、その過程において、「場」を媒介とする記憶の叙述にアッティカ史叙述および碑文からアプローチする視点を得られたことの意義は大きいと考える。なぜなら、アッティカ史叙述の大きな特徴としての「年代記」叙述や、現在を説明するための「起源」叙述には研究が蓄積されているが、「場」を媒介とする記憶の叙述については未だ議論の余地が残るからである。また、アッティカ史著述家のナラティブに保存された記憶を媒介とする「場」を古代アテナイの社会的文脈に位置づけることは、他のポリス・島嶼部における地域史叙述の断片テキストとの多様な視角からの比較研究が可能となるだろう。今後の展望としては、アッティカ史叙述において、過去に関する記憶が「場」とそれを形作っていた物理的な「モノ」とどのように結び付けられ、また語られたのかを、碑文史料を中心に実証的に検討していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹内一博	4. 巻 730
2. 論文標題 アッティカのデーモス碑文	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『歴史と地理』	6. 最初と最後の頁 26～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹内一博
2. 発表標題 アテナイの碑文慣習における冠の奉納と間テキスト性1
3. 学会等名 前近代におけるメディアとコミュニケーション研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹内一博
2. 発表標題 アテナイの碑文慣習における冠の奉納と間テキスト性2
3. 学会等名 前近代におけるメディアとコミュニケーション研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹内一博
2. 発表標題 アテナイの碑文慣習における冠の奉納と間テキスト性
3. 学会等名 日本西洋史学会第70回大会小シンポジウムI「古代地中海世界におけるメディア・コミュニケーション・間テキスト性」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuhiro Takeuchi
2. 発表標題 Stories in Capital Letters: (Epi)graphic Narratives of the Greco-Roman World in Japanese Manga
3. 学会等名 Osaka City University and University of Illinois at Urbana-Champaign 2021 Exchange Symposium: Global Cultural Diffusion across Time, Space, and Media (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹内一博
2. 発表標題 アッティカ史叙述におけるディオニュソス到来の記憶
3. 学会等名 地域史叙述ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹内一博
2. 発表標題 トリコス供犠曆におけるエウテュノスの誓い
3. 学会等名 古代ギリシア文化研究所2019年度年次総会・研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹内一博
2. 発表標題 『アッティカ誌』におけるディオニュソス到来伝承とポリスの歴史
3. 学会等名 古代史研究会第18回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹内一博
2. 発表標題 アテナイの「過去」を書き換える：『アッティカ誌』の成立と受容の文脈
3. 学会等名 大阪市立大学大学院文学研究科2019年度研究科プロジェクト第3回定例研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Emily Mackil, Nikolaos Papazarkadas, Ronald S. Stroud, Laura Gawlinski, Jan-Mathieu Carbon, Kazuhiro Takeuchi, Angelos P. Matthaiou, Stephen Lambert, Yannis Kalliontzis, Francesco Camia, Andronike Makres, Elena Martin Gonzalez, Maria Mili, Jenny Wallensten, Adele C. Scafuro, Georgia E. Malouchou, Fred S. Naiden	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 360
3. 書名 Greek Epigraphy and Religion: Papers in Memory of Sara B. Aleshire from the Second North American Congress of Greek and Latin Epigraphy	

1. 著者名 中井義明、堀井優、齊藤麻里江、藤井信之、篠原道法、竹内一博、岸本廣大、柴田広志、シルヴィア・バルバンターニ、坂井聡、米本雅一、波部雄一郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 284
3. 書名 『記憶と慣行の西洋古代史：エジプトからローマまで』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------